

## JANARD MISSION IN EAST TIMOR - 感想・コメント等

簡単にですが、JANARD ミッションに同行させて頂きましたピースウィンズ・ジャパン東ティモール事務所の中島から、いくつかの点に関しまして、感想なりコメントなりを書かせていただきます。

### 1. 東ティモールと農業・農村開発

「何故東ティモールなのか？」という問いについては、JANARD サイドの理由や論理があるかとは思いますが、東ティモールに滞在して活動している立場から見ますと、それなりにグッドタイミングで、場所選定も妥当性があるように思います。東ティモールの未来は、それほど有望ではありません。数十年の間は石油などの天然資源から多くの歳入を得ることになりますが、他の産業の見通しは全く立たず、やはり農業が鍵を握っています。とはいえ、厳しい自然環境、不毛な土地、低レベルな農業技術等々の制約のなか、農業分野の未来もなかなか厳しいように思います。

「食の安全保障」(Food Security) ということが、喫緊の課題となるなかで何ができるのか。とても高度な技術などは必要ないとは思いますが、逆にだからこそ、大きな挑戦のようにも思えます。

### 2. 調査団の構成、日程並びに訪問地

#### (ア) 調査団の構成

豊富なご経験・知識、秘められた情熱、様々なバックグラウンドをお持ちの方々が、調査団を構成し、活力のあるチームであったように見受けられました。

#### (イ) 調査日程

それなりに適度な調査期間であったと思います。ただもう少し、適度な休暇を入れるなどして余裕を持たせた日程がよかったかもしれません。これは、現地で日程を立てた私たちの責任でもあります。

#### (ウ) 調査地

東ティモール主要各地、それなりに網羅したものと思われます。もちろん、援助が届きにくい、東ティモールの中央南部が抜けてしまいましたが、プロジェクト形成に必要な情報は充分収集できたのではないかと思います。

### 3. 事前準備並びに情報収集

同行させて頂いて感じましたのは、事前準備や情報収集の必要性です。調査団の皆様は、それぞれに独自の活動を行っており多忙を極めておられる方々で、事前準備などは実際に不可能なことは承知の上で、しかし、準備の重要性と必要性を感じました。例えば、「環境」や「植林」という分野においては、これまで数々の団体が、ここ東ティモールにおいて活動してきました。これまでの他団体の活動を総括した上で、それらの利点・欠点、活動地域、等々をあらいだし、それを踏まえ調査に繋げていくようなところがあれば、また違った成果が生まれたかもしれません。

もちろん事前準備が、ある種の「偏見」を植え込んでしまうこともあり、「発見」をするためには、そのような固定化された見方から解き放たれている必要があることも確かです。調査団の皆様の自由な発想と発見が、Food Security (Lack of Food) という事象の、この国の多数派の論理に疑義を挟むことになったことは、調査結果とワークショップの成果から明らかであるように思

われます。

#### 4. 調査団の調査

4 D (Discover, Dream, Design, Do) という、わかりやすいフレームワークを主体に、新鮮な視点と自由な見方が存分に発揮され、短期間の内に大きな成果が実ったように思います。数多くの関係者が呪文のごとく唱える、「食の安全保障、灌漑、輸送運搬」という三種の神器を取り出し、そこから垣間見える問題点を指摘し追及しようとする方法には、感心いたしました。この国ではあまり聞かない独自の視点であるように思います。

#### 5. ワークショップ評価

##### (ア) ワークショップという活動

第2次ミッションにおいて「ワークショップ開催」という目標を立てたことは、やはりよかったように思います。「ワークショップ」を目標とし準備を進める過程で、多くのことを学ぶことができましたし、それを話の種に多くの方々と有意義なお話が出来たように思います。また、今後この事業が実施にいたるとなると、活動の一部が「ワークショップ開催」となるだろうことは想像に難しくなく、ワークショップ開催のコツや問題点を掴んでおくためにも、よい機会であったように思います。

##### (イ) テーマの妥当性

「Food Security」というテーマは、時宜を得たものであったように思います。当時53人が飢えのために亡くなった、などの報道もなされていきました（この報道は政治的な背景などがあつたり、死亡原因の特定が不正確であったそうです）。今後も引き続き、「食の安全保障」は、東ティモールにおいて中心的テーマでありつづけるでしょう。

##### (ウ) 準備・ロジスティックス等

それぞれの方が自身の仕事を抱えており、準備等に短期間しか割けられなかったことをかんがえますと、よくやりました、というのが率直な感想です。会場の「大きさ」が、ワークショップの雰囲気と密度を縮減してしまったり、参加者を募るのが後手後手になってしまいましたが、それ以外のところではそれなりに上手く事が運んだのではないかと思います。

#### 6. 井戸掘りの試みとそこから見えてきた実態・現実

当初、第2次ミッションにおいて、井戸掘りを試みて井戸を作ろうという案がありました。これは、第1次調査時の聞き取り調査において、農民たちから「水が問題だ」という訴えがあつたことから、井戸を掘ることで水は獲得できることを示そうというものでした。しかしながら、準備を進めるうちに、どうも問題は違うところにありそうだ、ということがわかってきました。それは、「～が問題だ」と外部者（政府や援助機関）に訴えることで援助を受ける「依存体質」の問題などです。こうして、最後の最後で、結局井戸掘りは中止になりました。これは苦い経験ではありますが、短期間の調査ミッションの間に、人々のこのような深い問題を体感することができたことは、今後に繋がっていく大事な経験になったのではないかと推測いたします。

#### 7. 東ティモール農林水産省のポリシーとストラテジー

簡単に最近の大きな流れに触れておきます。2004年における大きな飛躍のひとつは、農林水産省の政策と戦略フレームワークが、詳細な情報と共に、明示化されたことです。それは、Sector Investment Programme (SIP) の農業セクター版として配布され、その後、Policy And Strategic Frameworkとして、コンパクトな冊子も公表されました。これらのなかで、今後の方針が明確に記されています。2005年3月初頭にロスパロスという地で、3日間に渡って開催された農業省・

ドナー会合では、このあたりが1つの焦点になりました。

(ア) Food Security

より栄養価が高い良質の農産物を、生産性を上げて作りましょう、というのが基礎的なコンセプトです。様々な団体が取り組んでいますが、まだまだ試行段階であるように見受けられます。農林水産大臣は「農薬や化学肥料を使わなければ、この国の全人口に十分な農産物は生産できない」と、会合において、NGOの有機農法に挑戦を投げかけていましたが、まだまだ答えを出すのは尚早でしょう。

(イ) Market-oriented Agriculture

よしあしは別として、アグリビジネスを中心に市場指向の農業が大きな柱のひとつとなっています。これは結構強力な動きとなっており、今後もこの施策が多数とられることとなります。

(ウ) MAFF/NGO Coordination

2004年、農林水産省内にNGO Secretariatが新設されました。コーディネーションが重要な課題として浮上していたからです。今後も、NGOと農業省の連携や調整は、いろいろな場面で促進されていくでしょう。

8. 今後の課題

(ア) ファンド

ファンドが大きな課題であることは言うまでもありません。長期的な実施を支えるに足るファンディング・リソースを獲得しておく必要があります。

(イ) 場所選定

プロジェクト実施地の選定は難しく、慎重に決定する必要があるでしょう。多分に漏れず、東ティモールにおいても土地問題が浮上してきています。

(ウ) 現地パートナー (Local NGO) と現地実施体制

信頼に足る現地パートナー=Local NGOを探し出すことも、なかなか難しい課題です。プロジェクト自体よりも、マネジメント能力の欠如が大きな問題です。どのようにモニタリングしていくのか、等々、実施に移るに際しては問題が山積しています。

以上、JANARDプロジェクト形成調査に関する率直な感想・コメントを述べさせていただきました。ありがとうございました。

*END OF NOTE*